

日本分類学会連合ニュースレター

*News Letter published by the Union of
Japanese Societies for Systematic Biology*

No. 18 [2010年11月25日]

新連載「加盟学会のトピックス」

日本生物地理学会のミニシンポジウム 「次世代にどのような社会を贈るのか？」

森中 定治 (日本生物地理学会)

日本生物地理学会は、1928年(昭和3年)に鳥学者の蜂須賀正氏が同じく鳥学者の山階芳麿、黒田長禮らの助力を得て、当時の生物地理学の第一人者であった渡瀬庄三郎と共に、生物地理学を対象とした学会としてフランスに次いで世界で2番目に設立した。

渡瀬庄三郎は、トカラ列島の悪石島と宝島の間に関ヶ原系生物地理学における旧北区と東洋区の分割を示す“渡瀬線”で著名である。

蜂須賀正氏は、阿波蜂須賀第18代当主として生を受け、祖父が貴族院議長を務めたことから政治家としての道を嘱望された。しかし、彼は生き物に深い関心を持ち、アフリカ探検、東南アジアでの探検など世界を舞台とする鳥学者となった。

蜂須賀正氏は型破りの人でもあった。彼のひととなりを表す様々のエピソードが伝えられる(筑波, 2003)が、蜂須賀正氏を人間としてどう考えればよいのだろうか。

私が子供の頃は、緑豊かな環境と輝ける未来があった。現代に、人類の未来を輝かしく感じる若者がいるのだろうか。人類は未来に与える影響において、かつて経験したことのない強力なパワーをもった。自分や自国や自世代の利益のために、地球環境を大きく変え得るパワーをもった。蜂須賀正氏は、一面で伝統に沿わない非常識の人と評されたが、彼の行為は恣意ではなく自らの哲学に起因し、それに従って独自の判断をした結果であることが多い。蜂須賀正氏が、我々に残したものは、マニュアルのない、未曾有の時代へ対処し、希望のもてる未来を次世代に贈るためのツール、言葉を代えれば“人間の成長”を促すための有力なツールのひとつを示したのではないだろうか(森中, 2003)。

先代の日本生物地理学会会長、ハサミムシの分類学者であった酒井清六は1999年に創刊された英文誌“Biogeography”の巻頭に、「学会の発足初期の頃は、日本の生物学創成の時代であり主な研究としては分類学とせいぜい生物地理学しかなかったが、その代わり豊かな自然に裏付けられた輝かしい未来が、我々の前に常に横たわっていた。今は、どうか。豊かな緑は廃棄物に置き換わり、化石燃料と木材の消費による炭酸ガスの増加は、今や我々の生存すら脅かすまでになった。中略。この新しい雑誌は、単に分類学と生物地理学だけを対象とするのではなく、人間と自然の関係において、我々の子孫の幸福を、現在の利益より優先させる視点で自然を考える読者を encourage する論文を

掲載する雑誌となるよう希望する。」(Sakai, 1999)と記している。

日本生物地理学会は、研究対象として生物種を選ばない。総ての生物を対象とする学会である。研究の主体は生物と地理学の融合的な研究であるが、分子生物学が発展した現代において、生物地理学は系統学はもとより、生態学、行動学、進化学、分子生物学、社会生物学、保全生物学等を取り入れ幅広く発展する過程にある(Avise, 2008)。

我々は、この発展過程にある生物地理学を日本生物地理学会の研究の主体にするも、学会設立者および先代会長酒井清六の意思を継ぎ、生物学それ自体が究極的に目的とするもの、すなわち人類の永遠の発展と平和への貢献につなげるという意味表示の意味において、生物に係わるメインのシンポジウムや研究の成果発表とは別に、2004年からミニシンポジウム「次世代にどのような社会を贈るのか？」を大会における企画の一環として開催してきた。

「グローバル」という造語を最近よく耳にする。“act locally, think globally”を意味しており、大変含蓄のある言葉だと思う。我々は、自分の専門分野、自分の利益に直接関わる事柄については真剣に、また熱心に取り組む。各人が自由に自分のしたいこと、自己利益を追求すればそのこと自体が活力を生み、社会の発展につながった。しかし、もはやそれだけでは社会をより善いものにはできない。それどころか、人類が作り出してきたその強大なパワーそのものが、寧ろ禍いとなって人類を破滅へと導くように思われる。物理的な行為は、多くが自分自身が直接関わる身近なものにならざるを得ないけれども、ものを考える時は、自分、自分の組織、自国、自世代の利益を離れて、世界の人々、次の世代の人々のことを第一に念頭におかなければ、人間が生活する基盤そのものが失われてしまうステージを迎えているように思う。

ミニシンポジウム「次世代にどのような社会を贈るのか？」では、これからの人間社会について様々な分野の方からリラックスした縦横無尽なお話を頂き、我々のそれぞれの視点から疑問をおこなって人間社会の未来に対する貴重なヒントを頂いてきた。

講演および質疑は、その概略を年度末に発行する日本生物地理学会会報に掲載し、学会会員と共有してきた。講演者と演題は以下の通りである。人間社会の転換期である現代において、このミニシンポジウムが人間の成長に役立てば幸いである。

2004年(平成16年)

長谷川 真理子(総合研究大学院大学教授)

「人間は環境を変え、環境は人間を変える」

松田 裕之(横浜国立大学教授)

「風土、健康、平和とそれらを繋ぐ創意工夫」

2005年(平成17年)

西廣 淳(東京大学大学院助教)

「次世代に「自然のめぐみ」を贈るには：自然再生事

業の可能性と課題」
宮田 親平（日本医学ジャーナリスト協会名誉会長）
「飢餓から飽食へ、南北両世界をくぐり抜けて」

シンポジウム2「遺伝子で記述する生活史形質の多様性」
1月9日（日）10:00～15:00

2006年（平成18年）
山田 昌弘（中央大学教授）
「希望格差社会のゆくえ」
矢原 徹一（九州大学大学院教授）
「未来社会への第3の道」

日本分類学会連合加盟学会の大会・シンポジウム

種生物学会
第42回種生物学シンポジウム
会期：2010年12月10日（金）～12月12日（日）
会場：京都大学

2007年（平成19年）
上田 恵介（立教大学教授）
「いじめ、差別、戦争はなぜなくなるのか？ 一人間について、動物行動学が語るもの」
西岡 秀三（独）国立環境研究所前理事）
「持続可能な社会へのフロンティア：低炭素社会」

日本魚類学会
日本魚類学会年会
会期：2011年9月29日（木）～10月2日（日）
会場：弘前大学

2008年（平成20年）
加藤 尚武（京都大学名誉教授）
「未来を脅かすもの -温暖化と資源-」
猪口 邦子（参議院議員）
「戦争と平和と子どもたち」

日本古生物学会
日本古生物学会第160回例会
会期：2011年1月28日（金）～30日（日）
会場：高知大学

2009年（平成21年）
香山 リカ（立教大学教授）
「若者に自己肯定感を与えるために」
神野 直彦（総務省地方財政審議会会長）
「分かち合いの経済学」

日本貝類学会
日本貝類学会平成23年度大会
会期：2011年4月16日（土）～17日（日）
会場：九州大学箱崎キャンパス

2010年（平成22年）
野中 健一（立教大学教授）
「虫を‘食べる’目に学ぶ」
山田 胤雄（NPO法人エコネットくまがや副代表）
「子ども達に豊かな自然を残してあげよう」

国際生物学賞記念シンポジウム

国際生物学賞記念シンポジウムが以下の要領で開催されます。

引用文献
筑波常治 2003, 国際的業績と非常識の間. 日本生物地理学会会報, 58: 105-107.
森中定治 2003, 蜂須賀正氏生誕百年記念シンポジウムを終えて. 日本生物地理学会会報, 58: 115-119
Sakai, Seiroku 1999. Preface. Biogeography, 1: 1.
John C. Avise 2000, Phylogeography. 西田睦・武藤文人監訳 (2008), 生物系統地理学, 303pp. (東京大学出版会, 東京).

会期：2010年12月7日（火）～8日（水）
会場：筑波国際会議場

2010年GBIF国内ワークショップ

GBIF 国内ワークショップ「生物の学名と和名は何故ややこしいのか ～生物多様性情報検索のキー～」が以下の要領で開催されます。

日本分類学会連合第10回総会・シンポジウム

日本分類学連合第10回総会およびシンポジウムが以下の要領で開催されます。

会場：国立科学博物館日本館2階講堂
日程：2010年12月12日（日）13:00～17:00
主催：国立科学博物館・東京大学大学院総合文化研究科・国立遺伝学研究所
後援：日本分類学連合・自然史学会連合

会場：国立科学博物館新宿分館研修研究館講堂
共催：(独)国立科学博物館
日程：平成23年1月8日（土）～9日（日）

【プログラム】
13:00～13:05 開会挨拶
13:05～13:45 伊藤 希（筑波大学）
「名前はなぜデータベースの問題となるのか」
13:45～14:25 上田 恭一郎（北九州市立自然史・歴史博物館）
「古くて新しい問題，目録の作成 -日本昆虫目録の作成に従事して」
14:25～15:00 休憩

総会
2011年1月8日（土）10:30～12:30

シンポジウム1「日本の分類学の現状と展望」
1月8日（土）13:30～17:30

15:00~15:40 伊藤 元己 (東京大学)
 「被子植物における科のコンセプト変更とその対応
 -APG 体系への移行に関して」
 15:40~16:20 川本 祥子 (ライフサイエンス統合デー
 タベースセンター)
 「生命科学分野のデータベース統合化と生物名称 -
 データ・知識の共有に向けて」
 16:20~16:55 総合討論
 16:55~17:00 閉会挨拶

 日本分類学会連合ニュースレター 第 18 号
 2010 年 11 月 25 日発行
 発行者 日本分類学会連合
 事務局 〒169-0073 東京都新宿区百人町 3-23-1
 国立科学博物館
 編集者 富川 光

TAXA —— 生物分類学メーリングリスト

日本分類学会連合が運営するメーリングリスト
 〈TAXA〉は、生物分類学に関する情報交換や討論をす
 るためのメーリングリストで、生物分類学に関心をも
 つすべてのの方に開放されています。〈TAXA〉メーリング
 リストは下記の趣旨により開設されました:

日本分類学会連合は、「生物の分類学全般にかかわる
 研究および教育を推進し、我が国におけるこの分野
 の普及と発展に寄与することを目的(規約第 2 条)」
 として、2002 年 1 月 12 日に設立されました。現在、
 分類学に関係の深い 27 の学会が加盟しています。そ
 の後、本連合はこの目的に向かって様々な活動を展
 開してきましたが、このたび新たな事業として「メ
 ーリングリスト 〈TAXA〉」を開設することになりまし
 た。このリストの趣旨は、本連合からの広報のほか
 に、登録会員が互いに分類学に関する情報交換や討
 論をするための場を提供することにあります。した
 がって、このリストは本連合の加盟学会の会員ばか
 りでなく、分類学に関心をもつすべての方に開放さ
 れます。なお、リストへの登録など管理、運営は本
 連合の担当者が行いますが、投稿は登録会員なら誰
 でも自由に行えます。多くの方が登録くださいます
 ようご案内申し上げます。

2003 年 12 月 21 日
 日本分類学会連合
 代表:加藤雅啓

〈TAXA〉は 2003 年 12 月 13 日に開設され、2003 年 12
 月 24 日午後 5 時に稼働開始しました。2010 年 9 月 30
 日の時点で【935】名の会員が登録されています。入会
 を希望される方は、

- 1) メールアドレス
- 2) 氏名(日本語表記ならびにローマ字表記)
- 3) 所属

を明記の上、〈TAXA〉運営担当の三中信宏(taxa-admin
 @ml.affrc.go.jp)までご連絡ください。

[編集後記]

分類連合ニュースレターでは随時加盟学会員の皆様
 から広くご寄稿を募集しております。原稿は富川宛
 (tomikawa@hiroshima-u.ac.jp)に電子メールでお送り
 ください。電子メールが使用できない場合は FAX
 (082-424-7093)もしくは郵送(〒739-8524 広島県東広
 島市鏡山 1-1-1 広島大学大学院教育学研究科)でお送
 りいただいてもかまいません。皆様からの多数のご寄
 稿をお待ち申し上げます。

(ニュースレター編集担当: 富川 光)